

学校法人 仙台育英学園 秀光中等教育学校

二〇一四年度 東京選抜試験

# 国語

(第一問～第三問)

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
- ・この問題冊子は十三ページあります。
- ・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

かつてもう何十年も前、当時成城学園せいじょうくわん小学校の先生だった庄司和晃先生からうかがった話である。

ある日庄司先生は、小学校の教室でいきなり子どもたちに画用紙を配り、「さあ、アリの絵を描いて下さい」と言ったそうだ。

子どもたちはかなり当惑とうわくしたようだが、とにかく何とかアリの絵を描こうと、アリのイメージ注2を探りはじめた。

たちまちにしてイメージできたらしい子は、すぐ画用紙に描いていたが、まだイメージを探っている子もいた。

とにかくこうして、しばらくのちにはみんなの絵ができあがった。

それは子どもたちが作りあげたアリのイメージを示す絵であった。

絵ではアリの体は頭と胴体どうたいの二つに分かれ、頭に二本、胴体に二本の肢あしが生えている。ひげは二本、頭から生え胴体のほうへ向かって、つまり体の後方へ向かって伸びている。このひげに、たいていの女の子は赤いリボンをつけていた。

アリは昆虫こんちゆうであるから、体は頭と胴体でなく、頭と胸と腹の三つに分かれているのがほんとうである。これが昆虫の特徴ちゆうとくなのだ。そして、肢は四本でなくて六本。それが全部、胸から生えており、頭や腹（胴体）には肢は生えていない。

子どもたちが絵に描いたアリの絵は、まさに人間がイメー

ジしている **I** の姿、つまり、頭と胴体があり、それに四つ足が生えているという姿であった。

「アリの絵を描きなさい」と先生に言われた子どもたちが必死になってアリのイメージを探し求めたら、まさに人間が考えているふつうの **I** のイメージになったのである。

その次に庄司先生は、子どもたちに「実物」を渡した。シャーレと呼ばれる平たいガラスの容器に生きた大きなアリを一匹びきずつ入れ、それを子どもたちの数だけ用意しておいたのである。

先生はみんなの描いたアリの絵を、おうなかなかよく描けるね、などと言いながら集めてから、アリの入ったシャーレを一人一人の子どもに渡していった。「さあ、これがほんもののアリだよ。今度はこれをよく見て、アリの絵を描いて下さい。」

子どもたちはまたいっしょうけんめいに描きはじめた。絵ができあがったところで先生は絵を集め、同じ子の一枚目の絵と並べた。

先生がぼくに見せてくれたのは、この段階の絵二枚を並べたものだった。つまり、まったくソラAで描いたアリの絵と、同じ子が実物のアリを見ながら描いた絵とである。<sup>①</sup>これがじつにおもしろかったのだ。

ふつうこのような場合、実物を見せられた子どもはそれをよく見つめてできるだけそれに近い絵を描こうとするものだと、人はたいてい考える。教育の場ではとくにそうだとだれ

もが思っている。教育に際して「とにかく実物を見せろ」と言われるのは、先生たちのそのような思いからである。

ところがぼくが見せてもらった子どもたちの絵では、ほとんどまったくそのようにはなっていないかったのだ。

子どもたちが実物のアリを見て描いたはずの絵でも、その多くは依然としてアリは頭と胴、足は四本だった。

もちろん、ちゃんと体が頭、胸、腹と三部になり、肢が六本になったものもあった。けれど、多くはそうではなかったのである。

子どもたちの絵をよく見ていくと、おもしろいことがわかった。実物を見て頭、胸、腹、そして肢六本に「変化」したのは、一枚目の絵を何度も描いたり消したりしていた子どもの場合に多かったのである。一枚目の絵を太い鉛筆で自信満々、頭と胴、四本の肢と描いた子の絵は、実物のアリを見ても何一つ変わっていないかったのだ――

② ぼくはそこに人間のイリュージョン注3というもののもつものすごさを見たような気がした。

子どもたちが実物を見ていないわけはもちろんない。どの子だって、実物はちゃんと、十分まじめに見ているはずだ。

けれどその実物が、自分の思っているように見えてしまうのである。つまり、自分のイリュージョンによって作りあげられたものに見えてしまうのだ。そしてそれ以外のものは、存在しなくなっているのである。

庄司先生がぼくに見せてくれた絵には、じつは三つ目があった。その三つ目の絵とは、先生が実物のアリを子どもに見せながら、それについて説明をし、それから子どもが描いたものである。

実物を渡して見せて描かせた一枚目の絵を返しながら、先生はこんなふうな話をしたらしい。「うん、ますますよく描けてきたなあ。えらい、えらい。」

Ⅱ、アリの体ってほんとに頭と胴体しかないのかい？

すると子どもの一人がいった。「あれ？ もう一つあるよ。」他の子もすぐそれに乗る。「ほんとだ。三つに分かれてる。」

そこで先生が言う。「そうか。それが胸なんだよ。アリの体は頭と胸と腹の三つに分かれてるんだよ。」

胴体についてはこれでよろしい。さて、次は足だ。「ところで、足はほんとに四本かい？」<sup>③</sup>ここまですると子どもは反応は早い。「四本より多いや。」「じゃ、何本？」「六本だよ。」

「じゃその六本の足、どこに生えてる？ 頭と胸と腹に二本ずつ？」「ちがう。頭と腹には足生えてないよ。」「それなら胸に六本ぜんぶってこと？」「そう――」

これで足がきまった。あとはひげだ。

「みんなの絵を見ると、ひげはうしろ向きに生えているけど、ほんとにそうかい？」先生にそう言われて子どもたちはいっせいにアリを見る。「あれ、前向いてるよ――」

「そうだろ。だってアリさんはあのひげで前を探りながら歩

くんだから、ひげがうしろを向いていたら困るんだよね。」

こうしてできた三枚目の絵の、ちゃんと前を向いたひげ(触角)に、女の子たちはちゃんと赤いリボンをつけていた。

イリュージョンが **III** には、これだけの手間が必要な

のだ。しかも現実の生きたアリが手もとにいるのにである。

④ 人間は物を見たらすぐさまおいそれとそれに「なびいて」  
しまうわけではないのである。

重要なのは自分のもっているイリュージョン。あるいは現物を見たとたんに作りあげてしまったイリュージョン。そのイリュージョンによって人は現物を見るのだ。

けれど、もしそうでなかったならば、人は果たして現物が「正しく」わかるのであろうか？ 現物の複雑きわまりない姿をそのまま認識してしまえるものなのであろうか？

こう考えたとき、人間においてイリュージョンというもののもつ意味とその力が、ぼくには少し理解できるような気がするのである。

(日高敏隆「生きものの流儀」)

注1 当惑……どうしたらよいか分からず、困ること。

注2 イメージ……心にうかぶ姿。

注3 イリュージョン……思いこみ。

問一 線A・Bの意味として最もふさわしいものを次の

のA～Eからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A ソラで描いた

- ア 特に目的もなく描いた
- イ 何も見ないで描いた
- ウ たよらない手つきで描いた
- エ 実物をもとに描いた

B きわまりない

- ア たどり着くことができない
- イ 理解することがむずかしい
- ウ これだとは決められない
- エ この上なくはなはだしい

問二  Iに入れるのに最もふさわしいものを次の

A～Eから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 魚
- イ 昆虫
- ウ 動物
- エ 鳥

### 問三

線①「これがじつにおもしろかったのだ。」とありますが、筆者はどんなことが「おもしろかった」のですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 実物を見て描いたのに、本物のアリとちがった姿に描いていたこと。

イ 実物を見て描いたのに、何も見ないで描いた絵よりも自分勝手に描いていたこと。

ウ 実物を見て描いたので、まるで写真でとったような絵を描いていたこと。

エ 実物を見て描いたので、正確にアリの絵を描けるようになっていたこと。

### 問四

線②「ぼくはそこに人間のイリュージョンというもののもつものすごさを見たような気がした。」とありますが、筆者は何に對して、どのように感じているのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 一枚目の絵を何度も描いたり消したりした子どもに對して、二枚目も丁寧な描きぶりであったことはほんとうに素晴らしいと感心している。

イ 一枚目の絵を太い鉛筆で自信満々に頭、胴、四本の肢を描いた子どもに對して、二枚目も同様であったことにあきれるような驚きを感じている。

ウ 一枚目の絵を何度も描いたり消したりした子どもに對して、二枚目も同様にアリの実物をよくかんさつしているなあと心から感動し喜んでいる。

エ 一枚目の絵を太い鉛筆で自信満々に頭、胴、四本の肢を描いた子どもに對して、二枚目も同様にじょうずで堂々とした絵に描けたとほめている。

### 問五

□ IIに入れるのに最もふさわしいものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア かりに      イ それとも

ウ もちろん      エ だけど

問六 —— 線③ 「ここまでくると子どもへの反応は早い。」

とありますが、それはどういう理由からですか。その説明として最もふさわしいものを次のア、イ、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア その前に自分たちの絵の間違まちがいを一つ発見できたから。

イ 先を争って先生の質問に答える子どもが集まったから。

ウ もう実物のアリを見ないでもわかるようになったから。

エ 三枚目の絵を早く描きたいとわくわくしているから。

問七  IIIに入れるのに最もふさわしいものを、次の

ア、イ、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 大事になる

イ 成長する

ウ 修正される

エ 理解される

問八 —— 線④ 「人間は物を見たらすぐさまおいそれと

それに「なびいて」しまうわけではないのである。」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを次のア、イ、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間には自分の見方みかたや思いこみがあって、実物もその見方にしたがって見てしまうから。

イ 人間には自分の見方や思いこみがあって、実物を見なくともわかると思っおもっているから。

ウ 人間は豊かなイメージ力を持っていて、いつもいろいろな想像を頭かぶの中に描えがいているから。

エ 人間は豊かなイメージ力を持っていて、見た物をすぐに絵や彫刻ちようこくにしようと思おもえるから。

## 第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三月も終わろうとするころ、北陸の町の旅館に親子づれがおとずれる。あたたかなこの季節に、二人は冬の服装である。

小説の本文は、宿の女主人の視線によって進行している。

初めは、近在から市内の高校へ受験に出てきた親子かと思っ  
たが、女中によれば、高校の入学試験は半月も前に済んだと  
いう。そんなら、進学準備の買い物だろうか。下宿探しだろ  
うか。それとも、卒業記念の観光旅行だろうか——いずれに  
しても、二泊三日とは豪勢な、と思っていたが、書いてもらっ  
た宿泊カードを見ると、なんと北のはずれから来た人たちが  
ある。

「まさか、厄介なお客じゃないでしょうね。」  
と女中が声を潜めて言った。

(中略)

親子は、約束どおり日暮れ前に帰ってきたが、それを玄関  
に出迎えて、思わず、あ、と驚きの声を漏らしてしまった。  
母親は出かけたときのままだったが、息子のほうは、髪を短  
く伸ばしていた頭がすっかり丸められて、雲水のように青々  
としていたからである。

あまりの思いがけなさに、ただ目を見張っていると、  
「まんず、こういうことになりゃんして……やっぱし風がし

みると見えて、くしゃみを、はや三度もしました。」

母親は、しかたなさそうに笑って息子を顧みた。息子のほ  
うはにこりとませずにうつむいて、これまたしかたがないと  
いうふうに着い頭をゆるく左右に振っている。どうやら、ど  
ちらも納得ずくの剃髪らしく、

「なんとまあ、涼しげな頭におなりで。」

と、ようやく声を上げてから、ふと、宿泊カードに光林寺内  
とあったのを思い出した。

「それじゃ、こちらがお坊さんに……?」

「へえ、雲水になりますんで。明日から、ここの大本山に入  
門するんでやんす。」

母親は目をしばたきながらそう言った。

それで、この親子にまつわる謎が一度に解けた。大本山、  
というのは、ここからバスで半時間ほどの山中にある曹洞宗  
の名高い古刹で、毎年春先になると、そこへ入門を志す若い  
雲水たちが墨染めの衣姿で集まってくる。この少年もその一  
人で、北のはずれから母親につき添われてはるばる修行に來  
たのである。

それにしても、頭を丸めた少年は、前にも増して何か痛々  
しいほど可憐に見えた。さつき青々とした頭に気づいたとき、  
I 雲水のような、とは思ったものの、本物の雲水にな  
るための剃髪だとは思っても及ばなかったのは、そのせいだが、  
母親によると、得度さえ済ませていれば中学卒で入門が許さ  
れるという。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

けれども、この大本山での修行は峻烈を極めると聞いている。Ⅱ この幼い少年に耐えられるだろうか、他人事ながらはらして、

「でも……お母さんとしては何かとご心配でしょうねえ。」

と言うと、

② 「なに、こう見えても芯の強い子ですからに、なんとかこらえてくれましょう。父親も見守ってくれてます。」

母親は珍しく力んだ口調で、息子にも、自分にも言い聞かせるようにそう言った。

③ 息子が湯を使っている間、帳場で母親に茶を出す、問はず語りにこんなことを話してくれた。自分は寺の梵妻だ

が、おとしの暮れ近くに、夫の住職が交通事故で亡くなった。夫は、四、五年前から、遠い檀家の法事に出かけるときは自転車を使っていたが、町のセールスマンの口車に乗せられてスクーターに乗り換えたのがまずかった。凍てついた峠道で、スリップしたところを大型トラックにはねられてしまった。

跡継ぎの息子はすでに得度を済ませていたが、まだ中学二年生である。しかたなく、町にある同じ宗派の寺に応援を仰いでなんとか急場をしのいできたが、出費もかさむし、いつまでも住職のいない寺では困るといふ檀家の声も高まって、一刻も早く息子を住職に仕立てないわけにはいかなかった。住職になるには、大本山で三年以上、ほかに本科一年間の修行を積みねばならない。ゆくゆくは高校からしるべき大学へ進学させるつもりだったが、もはやそんな悠長なことは

言っていられない。十五で修行に出すのはかわいそうだが、しかたがなかった。

自分は明日、息子が入門するのを見届けたら、すぐ帰郷する。入門後は百日面会はできないというが、里心がつくといけないから面会などせずに、郷里で寺を守りながら、息子がおよそ五年間の修行を終えて帰ってくるのを待つつもりである。

「それじゃ、息子さんは今夜で娑婆とは当分のお別れですね。お夕食はうんとごちそうしましょう。何が好きかしら。」

そうきくと、母親は即座に、

「んだら、とんかつにしていただきゃんす。」

と言った。

「とんかつ……そんなものでよろしいんですか？」

「へえ。あの子は、寺育ちのくせに、どういふものかとんかつが大好物でやんして……。」

母親は、X そう言った。

だから、夕食には、これまででいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出した。しばらくすると、給仕の女中が降りてきて、

「お二人は、しんみり食べてますよ。今のぞいてみたら、お母さんの皿はもう空っぽで、お子さんのほうはまだ食べてます。お母さんは箸を置いて、お子さんがせつせと食べるのを黙って見てるんです。」C

それから一年近くたった翌年の二月、母親だけが一人でひよっ



こり訪ねてきた。面会などしないと強気でいても、一度顔を見ずにはいられなくなったのだろうと思つたが、そうではなかった。修行中の息子が、雪作務のとき僧坊の屋根から雪といっしょに転落し、右脚を骨折して、今は市内の病院に入院しているのだという。

「もう歩けるふうでやんすが、どういうことになっているやらと思ひましてなあ。」

相変わらず地味な和装の、小鬢注18に白いものが目につくようになった母親は、決して面会ではなく、ただちょっと見舞いに来ただけだと言つた。

息子の手紙には、病院に来てはいけない、夕方六時に去年の宿で待っているようにとあつたと言ふから、

「じゃ、お夕食はごいっしょですね。でも、去年とは違ひますから、何をお出しすればいいのかしら。」

「さあ……修行中の身ですからになあ。したが、やっぱし……。」

「わかりました。お任せください。」  
と引き下がって、女中にとんかつの用意を言いつけた。

夕方六時きっかりに、衣姿の雲水注14が玄関に立った。びっくりした。わずか一年足らずの間に、顔から体つきからも可憐さがすっかり消えて、見違えるような凜注19とした僧になつてゐる。去年、人前では口をつぐんだままだった彼は、思いがけなく練れた太い声で、

「お久しぶりです。その節はお世話になりました。」

と言つた。それから、調理場から漂つてくる好物のにおい  
気づいたらしく、ふと目を和ませて、こちらを見た。

「……よろしかったでしょうか。」

彼は無言で合掌注20の礼をすると、右脚を少し引きずるようになつながら、母親の待つ二階へゆっくり階段を昇つていった。

(三浦哲郎「とんかつ」)

- 注1 女中……宿で働く女の人の。
- 注2 雲水……諸国をめぐる歩く坊さんのこと。
- 注3 剃髪……寺での修行のために髪の毛をそり落とすこと。
- 注4 大本山……福井県にある永平寺のこと。
- 注5 古刹……ゆいしよある古い寺のこと。
- 注6 墨染め……黒い色の坊さんが着る衣。
- 注7 得度……仏門に入るための儀式のこと。
- 注8 峻烈……きびしくはげしいこと。
- 注9 帳場……客が会計をするところ。
- 注10 梵妻……坊さんの妻。
- 注11 檀家……寺に墓地を持ち、その寺を援助する家。
- 注12 悠長……のんびりしているようす。
- 注13 娑婆……ふつうの社会。
- 注14 即座に……その場ですぐ。
- 注15 給仕……食事のとき、そばにいて飲食の世話をすること。
- 注16 雪作務……積もった雪を除く作業。
- 注17 僧坊……坊さんが住む建物。
- 注18 小鬢……耳のところの髪のこと。
- 注19 凜とした……若々しくひきしまっているようす。
- 注20 合掌の礼……てのひらを合わせて拝むこと。

問一 ———— 線 a 「目を見張って」、 ———— 線 b 「口車に

乗せられて」の意味として最もふさわしいものを次の  
ア～エからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a 目を見張って

- ア 目をかけて  
イ 目をつけて  
ウ 目をほそめて  
エ 目をまるくして

b 口車に乗せられて

- ア たくみなことばにだまされて  
イ 値引きしてもらって  
ウ たがいに気持ちを通じあって  
エ 口ぐせのことばを信用して

問二

□ I～IIIに入れるのに最もふさわしいものを、  
次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア やはり      イ まるで      ウ はたして  
エ きっと      オ すぐ

問三 次の文章は本文 **A**～**C** のどこに入りますか。最も

ふさわしいところを選び、記号で答えなさい。

これは、ただの物見遊山ものみゆきさんの旅ではあるまい。宿泊  
カードの職業欄しごくばんに、主婦、とか、今春中学卒業、など  
と書き入れるところを見ると、あまり旅慣れている人  
とも思えないが、どうしたのだろう。

問四

□ Xに当てはまることばを、次のア～エから一  
つ選び、記号で答えなさい。

- ア にやにやと笑いながら  
イ はにかむように笑いながら  
ウ うれしそうに笑いながら  
エ こえをあげて笑いながら

問五

——— 線① 「痛々しい」とありますが、宿の女の人に  
とって、「痛々し」く見えた「少年」を表現している  
一つの文を抜き出し、初めと終わりの五字ずつで答えな  
さい。ただし、句読点も字数に含めます。

問六

——線②「なに、こう見えても芯の強い子ですからに、なんとかこらえてくれましょう。父親も見守ってくれています。」と言った母親の気持ちの説明として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 息子は少年であるが、雲水の修行にじゅうぶん耐えてくれるものと安心している。

イ 修行に耐えてほしいと息子に信頼しんらいを寄せ、また自分にも言い聞かせている。

ウ 中学卒業での修行はかわいそうだが、息子の希望をかなえてやりたいと思っている。

エ 息子が修行を積むうちに、父のようにりっぱになっていくだろうと確信している。

問七

——線③「問わず語りにこんなことを話してください。」とありますが、「話してくれた」内容の最後の五字を抜き出して答えなさい。ただし、句読点も字数に含めません。

問八

——線④「雲水」について説明した次のア～エの文章の中で、最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 好物のどんかつが夕食に出ると知った彼かれは、宿の人に合掌の礼をして感謝し、母の待つ二階へ昇っていったが、ひよわさはすっかり消えていた。

イ 夕食に、今回も好物のどんかつを宿に望んでくれ、ここまで育ててくれた、頭髪も白くなった母に、息子は、修行の成果をみてほしいと願った。

ウ 息子が修行の身であると知る宿の気づかいで、どんかつにきまった夕食であったが、その準備に気づいた彼は、いじらしい表情であいさつをした。

エ 一年前は彼の、今回は母の希望で、夕食はどんかつになったが、あいさつの後でそのにおいに気づいた彼は、うれしそうに宿の人に合掌の礼をした。

### 第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「これは木か何かの作り物だろう」。福島県郡山市立明健（こおりやま）小学校三年の橋本裕くん（はしもとゆうたか）はお母さんとみそ汁を作った時にこれを見て、思った。だが、目玉みたいなのがあり、こちらをにらんでいる。気味が悪い。

裕くんはお母さんに一冊の本をもらって、<sup>②</sup>その正体を知った。本のタイトルは（注1）「煮干しの解剖教室」（かいぼう）（仮説社）。

<sup>③</sup>何より驚いたのは、その煮干しがカタクチイワシという海の魚だということだった。これが生きて海の中を泳いでいたなんて、とても信じられなかった。

本では煮干しをちぎって、そのナカミ（a）を細かくカンサツ（b）してみせている。さっそくお母さんから何本か煮干しをもらって調べると、なるほど脳も、心臓（c）も、肝臓もちゃんとあった。「生きるためにひつような体の仕組みが、人間と同じように全部あることにびっくりした」。

そう記す裕くんの読書感想文は第五十八回全国コンクール小学校中学年の部で毎日新聞社賞を受けた。魚がニガテ（c）だった裕くんにそのうまさを知ってもらおうとしたお母さんのみそ汁作りサクセン（d）は大成功（e）だった。正体を知って改めてかみしめた煮干しは「おいしかった」のだ。

人間はほかの生き物を食べて生きている。煮干しのおいしさは、イワシが海の中でキラキラと元気に泳いでいた証拠にちがいない。そう考えた裕くんは書いている。「ぼくは、イ

ワシの元氣をもらって生きている。ふしぎに『A』のことばが頭に浮かんだ」。

おかげで最近ではアゴ（トビウオ）でだしをとるのも覚えたという裕くんである。末は生物学者か、料理家か——だが

**B** 歴史家になりたいという。本の森での大冒険はまだ始まったばかりだ。

（毎日新聞「余録」二〇一三年二月九日掲載）

注1 煮干し……小魚を煮て干したもので、だしをとるのに使う。

問一 ……線 a～e のカタカナは漢字に直し、漢字は読み

をひらがなで書きなさい。

- |   |      |   |      |   |     |
|---|------|---|------|---|-----|
| a | ナカミ  | b | カンサツ | c | ニガテ |
| d | サクセン | e | 改め   |   |     |

問二

——線①「お母さんとみそ汁を作った」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんは、裕くに人間は生き物を食べて生きてることを知ってもらいたいと思ったため。

イ お母さんは、裕くに煮干しがカタクチイワシという海の魚だと知ってもらいたいと思ったため。

ウ お母さんは、魚がニガテな裕くにそのうまさを知ってもらいたいと思ったため。

エ お母さんは、裕くにカタクチイワシの脳、心臓、肝臓を知ってもらいたいと思ったため。

問三

——線②「その正体を知った。」とありますが、「その正体」とはここでは、何を指していますか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 木か何かの作り物

イ みそ汁

エ 一冊の本

問四

——線③「何より驚いた」の「何より」の意味を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 何かと

イ なにげなく

問五

——線④「臓」の総画数は何画ですか。またこの字の太字の部分は何画目ですか。それぞれ漢数字で答えなさい。

臓

問六

——線⑤「正体」と同じ組み立て方の熟語を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 登山

イ 冷風

ウ 温暖

エ 公私

問七

□ Aにあてはまる語を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア おいしい

イ なるほど

ウ びっくり

エ ありがとう

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問八

B にあてはまる語を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ずっと      イ かなり  
ウ 実は      エ たまに

問九

この文章で筆者が述べている内容と最も一致するものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 裕くんはみそ汁を作り、魚が好きになり、煮干しを「おいしく」味わうようになった。将来は、生物学者か、料理家になりたいと思っている。

イ 裕くんは一冊の本で、煮干しがカタクチイワシという魚であることを知った。そのおいしさもわかった。本で物を知る冒険は始まったばかりである。

ウ 裕くんは一冊の本によって、煮干しのことを知った。そして、自分で煮干しを買って調べ、「あご」のみそ汁も作りおいしさを味わった。

エ 裕くんは一冊の本によって、煮干しがカタクチイワシという魚で、そのおいしさもわかった。これからは魚と森について知識の探検を始める。